

若者が夢を持てる社会に



長崎大学 環境科学部

教授 浜 民 夫

1965年	東京農工大学工学部卒業 労働省入省
1976年	経済企画庁調整局産業経済課課長補佐
1978年	労働省労政局労働経済課課長補佐
1989年	岩手労働基準局長
1993年	長崎労働基準局長
1997年	長崎大学環境科学部教授（10月）
2002年	長崎県雇用ミスマッチ対策会議 会長

— ゆめ総体に想う —

この夏、全国の若者が長崎に集い、「全国高等学校総合体育大会」が開催されました。私も「かきどまり陸上競技場」での開会式に参列して、スポーツにかける子供たちの勝ち負けを超えた純粋な情熱に久しぶりに心を洗われました。

今、私たち大人は、小学校、中学校、高校、大学に通う若者たちに何を見ているのでしょうか。「若者たちから夢を早々と奪い取り、“夢早退”の世の中にしているのではないだろうか」、「若者たちから夢をもらうのではなく、若者たちの将来を考えてあげるべき『ゆめ』総体なんだ」と開会式が行われたスタンドで思うことしきりでした。

私たち大人は、どうして若者たちに働く場を提供できないのでしょうか。長崎県内の高校、短大、大学の本年3月の新卒者のうち求職希望者は高校、短大、大学を合わせて6,935名です。うち就職内定者は5,762名となっています。実際のところ、就職することを途中で断念してフリーターや無業者の道を選んだ学生、生徒も相当数いますが、その実態はこの統計から除かれています。



左は「長崎新聞 15年5月29日号」(注)15年5月に開催された県総体の入場行進

右は長崎ゆめ総体総合開会式15年7月28日での公開演技 諫早の伝統芸能「まつりのののこ」の13校1,200名の演技

一方で平成13年の事業所・企業統計によると、長崎県内には7万6,403の事業所があり、うち従業員が10人以上の事業所は1万4,168所もあります。一事業所で一人採用する気構えで臨むと、この問題は簡単に解決していきます。

若者たちの「やる気の無さ」、「無責任」、「常識の無さ」を嘆く前に、そのような子供たちの大量生産に手を貸して来た主犯格は、私たちであることに気付くべきです。今となっては、「家庭」、「地域」、「学校」、「職場」の総ぐるみで若者たちを“優しく育てる”ことが必要だと思っています。皆さん 何とかしましょう！

— 誰でも大学生に —

中学校も高等学校も大学に入学するための通過地点になっていて、生徒たちはひたすら大学受験のために必要な勉強だけを優先しており、受験テクニックや教師の指導によって、「生物」を取らずに医学部への入学を目指したり、「物理」を取らずに工学部を目指したり、受験に出る科目の「国数英理」だけとか「国英」だけしか勉強しないで大学に入学してくることが起こりえます。日本の歴史を知らない、あるいは世界史を知らないで国際化社会をどのように生きていくのでしょうか。音楽や美術のような授業を軽視したがために、幅広い人間性や教養、常識を培うことができないまま大学生になり、卒業して社会人になる学生たちがいたとしたら恐ろしいことです。何とかしましょう！

— 戸惑いの大学生活 —

大学に入学することは、あくまでも自己実現のための手段であってほしいのですが、希望の大学・学部をめ得太く入学できた学生も、力及ばず偏差値や高校教師の誘導によって入学した学生も、学歴を掲げて有名企業の社員や官僚になっていくことがゴールだとしたら、さびしい限りですね。

大学の授業に出てみると、高校時代の授業方法と違い、「問題」が出ない、「暗記」ものが無い、「教科書」が無い、「どこどこにアンダーラインを引きなさい」と言われることもありません。また、「授業の内容は全てを尽くしているわけではなく、全体の体系の一部に過ぎないので足りないところや不足しているところがあります。興味があればそれは自分で補いなさい」、「自分で問題を見つけなさい。そして解決方法も考えなさい」、「早くやりたいことを見つけなさい。そしてそれに取りかかりなさい」と教官に言われ、主体性を求められることに学生は戸惑います。嗚呼、それでも、何と

かきましょう！

— 乏しいコミュニケーション力 —

若者のカップルが連れ添って歩いているとき、二人が別々の友人にケイタイをしている姿や別の友人から掛かってきたケイタイに返事（信）するため連れの友人を放っている姿を見かけることがあります。お互いに話すでもなく、第三者と連絡を取り合っているのは、どうにもオカシなことだと思います。せめて、二人でデートする時にはケイタイの電源を切るぐらいのことはできないのかとやきもきするばかりです。

学生の表現力の乏しさは、レポートとかプレゼンテーションに現れてきています。しかも加速化しているように思えます。長い受験生時代を通して作文や表現力に力を入れたりすることが無く、本を読むことを軽んじていたことに、ケイタイ文化の氾濫が輪をかけています。「どこ、何してる、どうする」くらいで一日の用事が済むような会話では、ボキャブラリイは育たないしコミュニケーション力は失われていきます。キチンとした挨拶や会話を、親や地域の人、学校の教職員などと日常生活の中でしてこなかったことの影響が、小中学生、高校生、大学生そして若年層に現れています。何とかきましょう！

— 新卒採用は、かつての「中高卒」から今は「大卒」中心に —

昭和40年3月の新卒採用者は150万人で、そのうち中卒者は62万5千人と全体の42%、高卒者は70万人で47%と中高卒で90%を占めていました。この時代には、大学に進学する者は少なく、中学校や高等学校を卒業して就職するのが一般的でした。大学に入学する者が少なかったため、大卒の就職者も13万5千人と全体の9%に過ぎなかった時代です。

平成14年3月の大学卒の採用数は31万1千人で、新卒採用者63万3千人の49%と半数に迫り、学歴別では最大のシェアを占めるに至りました。この割合は、37年前の中卒採用者の割合を大きく超えています。「大卒」というレッテルの一般化が進んでいます。

— 増えるモラトリアム（猶予期間）を求めて卒業していく子供たち —

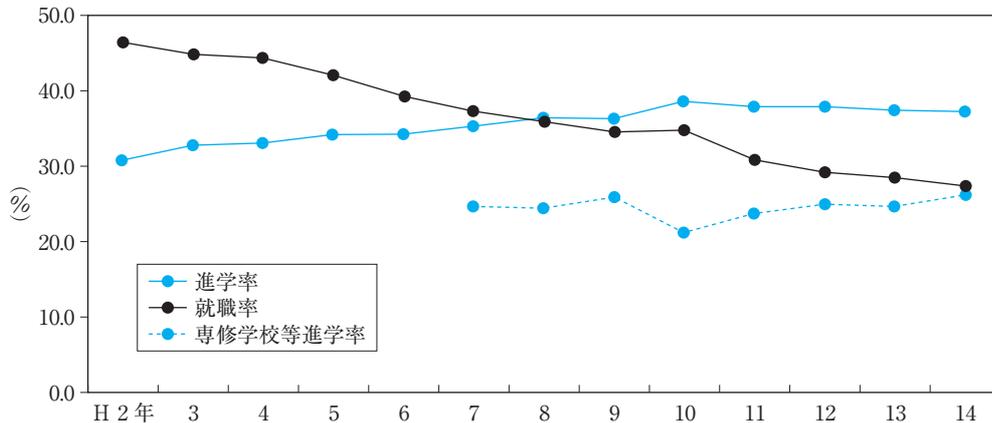
高等学校を卒業しても就職せずに、なおかつ、進学もしない若者、さらには、大学卒業後、大学院に進学したり、あるいは、卒業しても就職しない若者の数はどの程度

存在するのでしょうか。文部科学省「学校基本調査」でその実態を見たいと思います。

高等学校卒業生の進学率は、この2年、全国平均は40%前後で推移し、長崎県では37%台で推移しています。一方、就職率は長期に渡って低下傾向にあり、平成14年3月の就職率は全国平均で17%、長崎県が27%となっています（*就職希望者を分母にすると、就職率は83.6%になります）。この進学率と就職率の他に専修学校等進学率があります。しかし、これらに進む子どもたちの他に、もう一つの集団があります。モラトリアム（猶予期間）（第1図の(注)を参照）状態に留まっているグループ層とみられます。長崎県の高高等学校卒業生のデータで見てみましょう。

第1図 長崎県の高高等学校卒業生の進路

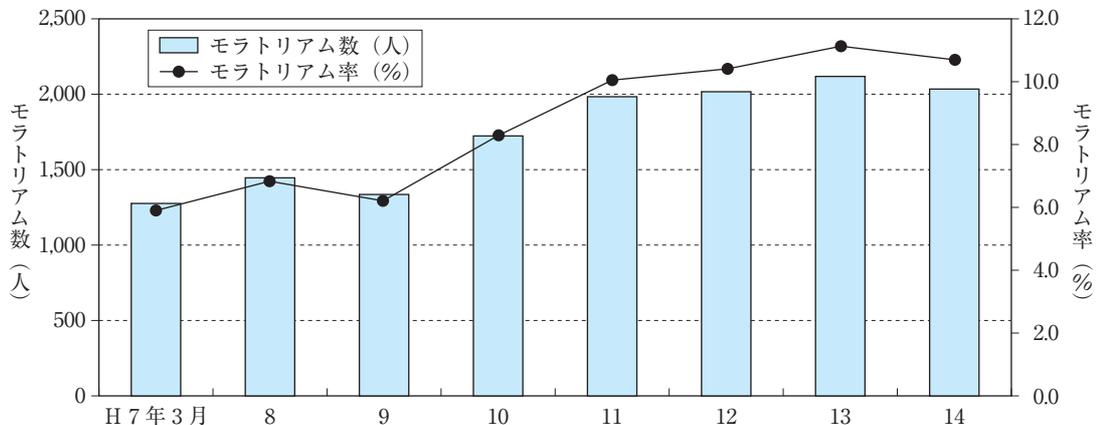
(1) 高等学校卒業生の進学率・就職率の推移（長崎県）



資料出所：長崎県統計課「学校基本調査」

- (注) (1) 進学者には、大学、短大、大学・短期大学の別科・通信教育部、高等学校専攻科、盲・聾・養護学校高等部の専攻科進学を含む。
 (2) 専修学校等進学者とは、専修学校（専門課程）進学者、専修学校（一般課程、高等課程）、各種学校（予備校等）、公共職業訓練施設等の入学者をいう。
 (3) 就職者には進学しながら仕事を持っている者を含む。

(2) モラトリアム



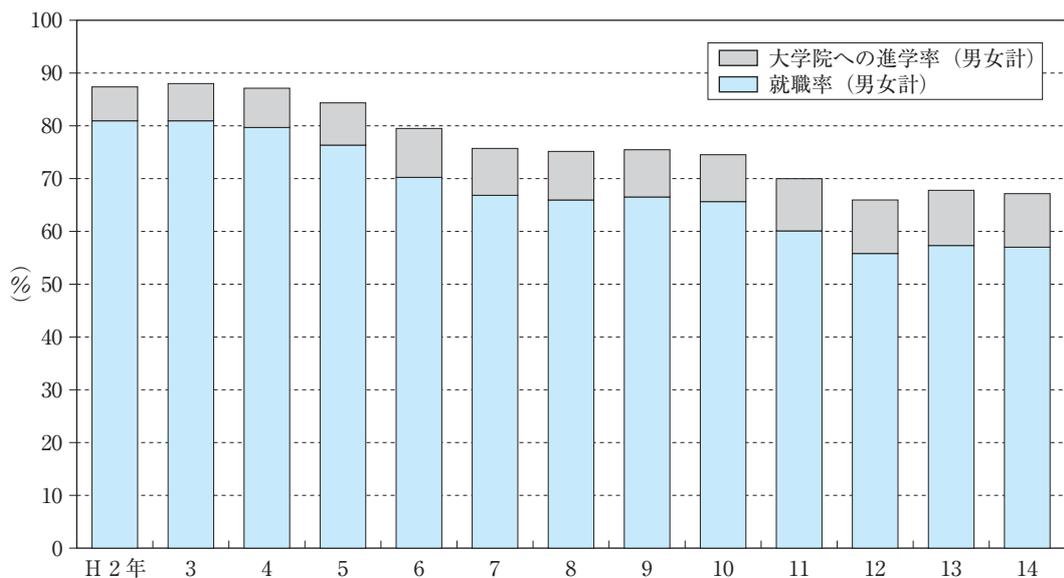
- (注) (1) モラトリアム数とは、進学もせず、就職もせずに卒業した数をいう。ただし、死亡も含む。
 (2) モラトリアム率とは、卒業者数に占める割合である。
 (3) モラトリアム・人間とは、いつまでもモラトリアム（猶予期間）の状態に踏みとどまって、実社会に同化できないでいる若者たちをいう（講談社「日本語大辞典」から引用）。

平成14年3月の長崎県内の高等学校卒業生1万8,998人の10.7%に相当する2,036人が就職も進学もせずに卒業した生徒の数です。この数は12年から2千人を超えるようになっていきます。これは大問題だと言えます。

大学生にも同じような傾向が見られます。14年3月の全国の大学生の就職率は57%、大学院進学率が11%で、モラトリアムを含む就職も進学もしない割合が32%となっています。この就職も進学もしない大学新卒者の割合は平成2年3月の13%から次第に増えはじめ、7年が24%、12年が34%となっています（第2図参照）。

しかし、子どもたちはやがて働いて収入を得て自活・自立の道を歩まないとならないのですが、果たして自立はできるのでしょうか。親離れの覚悟はいつどのようにして芽生えてくるのでしょうか。親離れさせましょう！

第2図 四年制大学学部卒業生の進路



資料出所：文部科学省「学校基本調査」

(注) (1) 卒業生に占める割合である。

(2) 進学者とは大学院研究科、大学学部、短期大学本科、専攻科、別科のいずれかに進んだ者である。

— 採用抑制に精を出す傍ら、息子や娘をパラサイトさせるお父さんたち —

文部科学省の調査によると、新卒者の就職は減少傾向が続いています。経済の高度成長期の昭和40年3月の採用数は年間150万人と日本経済の拡大期にあたり絶頂期でした。それから、25年後のバブル経済末期の平成2年3月には121万人とかなりの採用数でした。そして、産業界や企業の成長、拡大に合わせて、企業が必要な要員を確保できるように、高等学校や短大・高専、大学の入学定員数が増え続け、大学の大衆化が進んできました。しかし、平成12年3月の採用数は72万5千人、平成14年3月

の採用数は63万3千人と、平成2年の半分、平成12年と比べても2年間で10万人近くも削減するという、情け容赦の無い対応を産業界は行っています。新卒者にとっては「学校は出たけれど失業が待っている」というような悲惨な状況をつくり出しています。

バブル経済が破綻した後の不良債権の処理や構造改革の促進などで日本経済が低迷しているからといって、手の平を返したように、新卒者に仕事を与えないという企業、官庁の対応は果たして許されることなのでしょうか。

「組織の存続のため」とリストラを実行しているのは、組織の中核にいるお父さんたちで、その犠牲になっているのは自分たちの子供であるとの認識はあるのでしょうか。そしてその親たちが、息子や娘にパラサイトを許したり、フリーターを許したりしているとしたら、息子や娘を本当に駄目にしていく張本人は「親たち」でしょうね。

「2、3年ならお父さんの収入で何とかなるから」とか「やりたいことが分かるまで良く考えなさい」とか「無理してヘンなところに就職するなら」とか「公務員になるために専門学校に通うなら」と言うくらいなら、中高年階層の賃金を20%くらい辞退して、その分で新卒者に職場を提供する勇気は無いのでしょうかね。

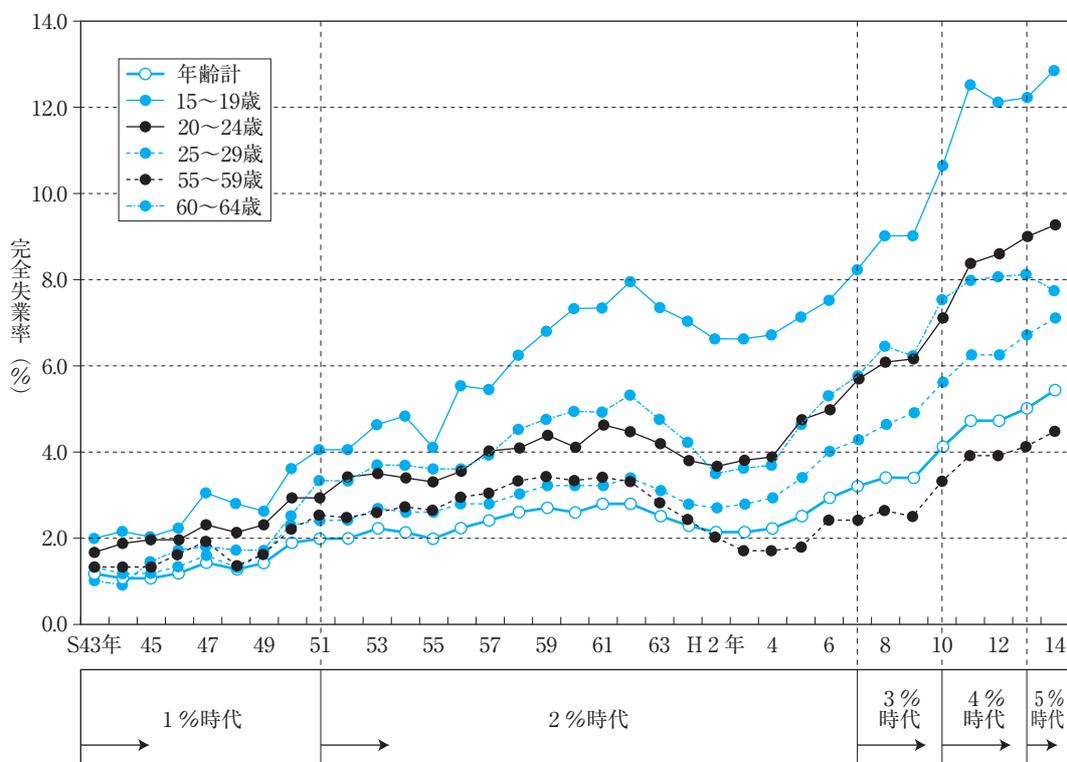
子離れできていないお父さんやお母さんはいませんか。子離れしましょう！

— 若年者の失業率が高い —

第3図を見て下さい。我が国の失業率の推移をみると、高度成長期は1%台、安定成長期からバブル経済時代は2%台、バブル経済の崩壊が始まると3%台から4%台、そして平成13年に5%となり、14年は5.4%となっています。注目されるのは、いつの時代も若年者の失業率が高いということです。とくに15～19歳層は、昭和45年以降にその傾向が顕著にみられ、平成14年には12.8%になっています。20～24歳層も60～64歳層の動きと同じように悪化してきていますが、平成11年以降、60～64歳層より悪化が目立つようになり、14年には9.3%になっています。

若年失業率が急速に悪化していることが、深刻な社会問題になりつつあります。

第3図 完全失業率の長期的推移



資料出所：総務省「労働力統計調査」
 (注) 昭和35年から昭和50年までの16年が完全失業率年齢計1%時代である。

— 3年で七五三現象 —

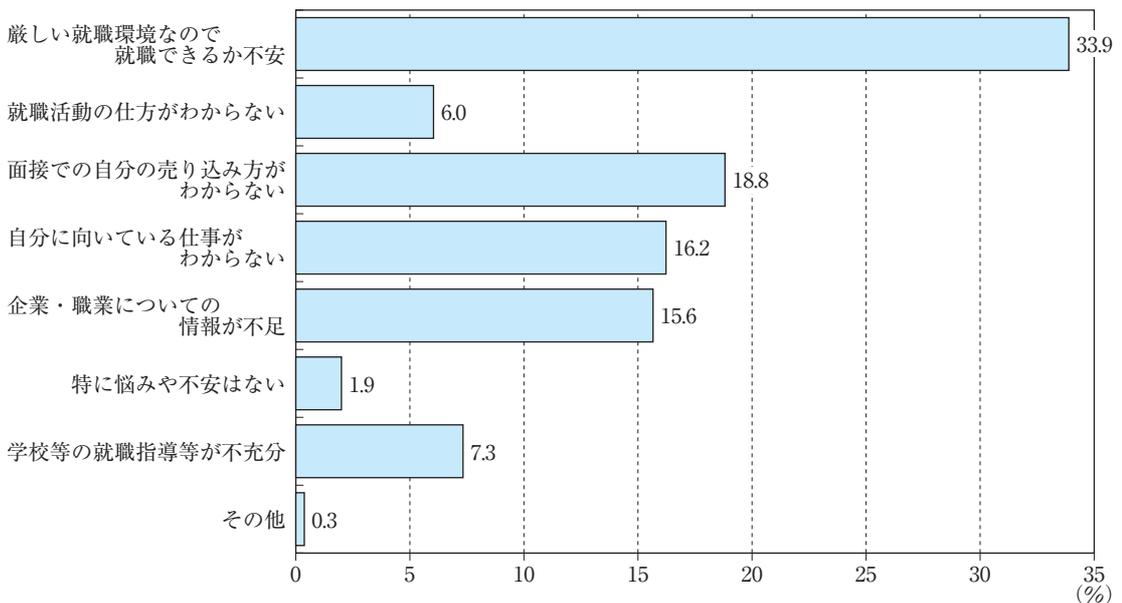
厚生労働省「平成14年版労働白書」によると、若年者の失業率の上昇には自発的離職の増加が大きく影響し、「七五三」と言われるように、中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割が、3年以内に最初に就職した会社を辞めています。そして、この割合は1990年代後半において高まりを見せています。

何故、若者はこんなに就職環境が厳しい折にもかかわらず、あっさりと会社を辞めるのでしょうか。企業の人事担当者や若年求職者の意見は次のようなものです。

産業界では、大学卒業後3年以内に3割が離職する実態に衝撃を受け、その要因として職業選択のミスマッチを挙げ、とくに学生の「就職観」や「勤労観」の欠如、「忍耐力」の不足を挙げています。長崎市で開催された「大学、短大並びに高専就職指導担当者と大学等求人予定事業主との懇談会」においても、事業主側から「他の職種に変わりたくないとか、転勤をしたくないとの理由で2年以内に2名が辞めた。職業に対して認識が不足している」とか、「職業意識を持っている学生や働く意欲のある学生に育てて欲しい」と大学側に注文を付けています。

一方、長崎県内で就職活動をしている大学生が直面している悩みは、「厳しい就職環境なので就職できるか不安」(33.9%)が多いのは止むを得ないとして、「面接で自分の売り込み方がわからない」(18.8%)、「自分に向いている仕事かわからない」(16.2%)、「企業・職業についての情報が不足」(15.6%)などの職業教育に係る内容が50.6%にも達しています。

第4図 就職に対する悩み・不安



資料出所：ハローワーク長崎調べ

学生・生徒が就職活動に直面するまでの間、職業や産業の実情について知らなかったり、働くことの意味を考えること無く、また、その経験に乏しいことや、将来の職業生活に対する認識が不足していることなどが原因と考えられます。

産業界の立場からも、学校サイドの立場からも、学生・生徒が職業社会への移行が円滑に行われることがこれまで以上に重要である、という問題意識が広がりつつあります。皆で何とか若者を育てましょう！

全国で雇用ミスマッチ対策が緊急課題として取り上げられていますが、長崎県にも「長崎県雇用ミスマッチ対策会議」が設置され若年失業者対策が始まりました。

経済産業省、厚生労働省、文部科学省など政府内にもインターンシップの導入対策などで、「若者を何とかしましょう！」という気概が現れはじめています。

— 失われた40年を取り戻しましょう！ —

どうしてこんな事になったのでしょうか。我々は40年間も豊かさを求めGNPも所

得も世界のトップクラスに押し上げてきたのに。経済発展を国是とし、高等学校や大学の増設を進め、子供に高等教育を行うことが可能となり、産業界も成長のために必要な高学歴マンパワーや技術者の採用が可能となってきたのですが、新卒一括採用、終身雇用、年功序列の雇用形態と密接に結びつき、企業にも家庭にも学校にも学歴主義を根付かせてしまいました。子供の資質、能力を十分に生かし伸ばすには、真理と正義を愛し、個人の資質を尊び、いかに生きるかを教えるべきなのに、大切な時期に学校は、子どもたちの個性を殺し、一つの物差しに過ぎない偏差値による順位づけや受験のノウハウを教える場になってしまったのでしょうか。音楽や図画工作、技術家庭、体育が好きな生徒たちも、偏差値が低いと受験生中心の教室の中で疎外感や劣等感で自己否定に陥り、その能力を伸ばす機会が失われていくことになります。

子供達は今、家庭や町内、学校が子供を叱り躰けることを止めたため、「礼節を知り、人を愛し人の痛みを知り、我慢や挫折を知り、社会のために貢献したり、国を想い、人のために自己犠牲をいとわない心を育てる」という体験や知見が得られないままに育っています。その子供たちは、やがて組織の中堅として企業や官庁、学校や病院に勤め、更にその子供達が学校で依然として受験勉強、家庭では個室でTVゲーム、IT、iモードで一人遊びをし、人と人の関係が作れないまま大人になっていきます。子供の心は荒廃し続けているのです。

子供を甘やかさず、手抜きをせず、向かい合って人生を語り育てることは、子供との血みどろの闘いになります。父親が会社に逃げ込み、仕事に打ち込み、子育ては奥さんということでは駄目です。子育てや学校行事、地域のことに関心を持ちましょう！

「2003年長崎ゆめ総体」は長崎県内の高校生が一人一役でボランティアとして参加し、総合開会式をはじめ各競技会場における運営を行いました。開会式での大会賛歌「大空へ・・・」の素晴らしい900人の高校生の演奏、2,100人の高校生の素晴らしい公開演技、そしてその練習期間を考えると、受験以外にエネルギーの方向を変えてやると高校生のパワーは凄いなとつくづく感じたところでした。

原因は分かっています。40年かけて失ったこれらの回復には時間がかかりますが、根本から時間をかけて、総合的にやり直しましょう。

さあ、皆んなで次世代を任すことになる若者を大切に育てましょう！